

ベトナム人日本語学習者による 日本語オノマトペの使用実態と 産出傾向

ゲエンティ タイントゥイ

◆要旨

日 本語オノマトペが日本語学習者にとって習得が難しいことは、多くの先行研究で指摘されているが、学習者が日本語オノマトペをどの程度使用できているかについて実証した研究は限られる。そこで、本研究では、独自に制作したアニメーション映像を材料に、ベトナム人日本語学習者がどの程度、日本語オノマトペを適切に使用できているかを明らかにする調査を行い、オノマトペの産出傾向を検討した。その結果、日本留学経験がある学習者及び日本語レベルの高い学習者ほど、オノマトペの使用傾向が母語話者に類似する一方、該当のオノマトペがわからない場合、反復造語法を用いたり物事の状態を擬音的に捉え、オノマトペを産出することがわかった。

◆キーワード

オノマトペ、ベトナム人学習者、反復造語法、産出、アニメーション

◆ABSTRACT

The fact that Japanese Onomatopoeic and Mimetic Words are difficult for Japanese as a second language (JSL) learners to master is pointed out in many previous studies; however, demonstrated studies are limited. Therefore, this study used original animation to conduct a study that would clarify how much Vietnamese JSL Learners can use Japanese Onomatopoeic and Mimetic Words and to examine the trends in production of unknown such words. The results showed that learners who have studied in Japan and who have a high level of Japanese exhibit many similarities to native speakers in using onomatopoeic and mimetic words. In addition, Vietnamese JSL learners use the duplication method or the sound-imitating method to produce unknown Japanese onomatopoeic and mimetic words.

◆KEY WORDS

onomatopoeic and mimetic words, Vietnamese learners, duplication method, production, animation

Vietnamese JSL Learners' Usage and Production of Japanese Onomatopoeic and Mimetic Words

NGUYEN THI THANH THUY

1 先行研究及び研究目的

日本語にはオノマトペと呼ばれる語群が豊富に存在し、日本語による言語生活に不可欠な要素となっている。しかし、これらの言葉は感覚的で、日本語教育において重視されていない現状があり、日本語学習者にとって難しいことがしばしば指摘されている（張1989, 金1989, 彭2007, 有賀2007）。しかし、学習者が実際に日本語オノマトペをどの程度使用できているかという実証研究はまだ限られるようである。その例として、中石ほか（2011）及び吉永（2011）、吉永（2017）が挙げられる。

中石ほか（2011）は、二つの課題を実施し、中国語母語話者が日本語オノマトペをどのくらい使用できるかを調べたものである。一つ目の課題はアニメーションにより使用文脈を呈示してオノマトペの使用を誘出する産出課題で、二つ目の課題はオノマトペを呈示して使用文脈を想起できるかを調べる作文課題である。二つの課題では同一の39語のオノマトペを実験材料としている。対象は日本在住の中国語を母語とする上級日本語学習者10人で、統制群として、母語話者の22人にアニメーション課題を実施している。その結果、上級学習者で日本に住んでいるにもかかわらず、いずれの課題も中国語母語話者の正答率が低く（平均24.4%）、オノマトペの習得の難しさが裏付けられている。一方で、多くの誤用があったことが述べられているものの、その誤用の原因は明らかにされていない。貴重な研究ではあるが、データが日本在住の中国語を母語とする日本語学習者10名に限られており、人数を増やし、学習者のレベルをそろえる必要があるだろう。また、オノマトペは日常生活で学ぶことが多いため、日本での日常生活におけるオノマトペの使用状況も検討する必要があるだろう。

吉永（2017）は、「ずきずきする」「ぺこぺこだ」のような心身の状況を表す擬態語を調査材料とし、在中国の中国語母語話者（上級23名、中級22名、初級29名）を対象とした3種類のアンケートをもとに習得状況を観察している。その中のアンケート①では擬態語文の文末「だ/する」を選択させるアンケートであるが、結果として「ぞっとだ」「ずきずきだ」「からからする」「ぺこぺこする」の誤用が全レベルで多く、これは動詞、形容詞、副詞の用法や品詞分類の知識がないこと

による誤用であると主張している。アンケート②では、心身状況を表す擬態語を作って文を作成させる全文作文課題を実施している。その結果、文末選択の課題（アンケート①）で誤用率の高いものは全文作文課題でも誤用率が高いことが明らかになった。この誤用傾向から、擬態語の習得と品詞分類の知識の関連が推測され、誤用を減らすためには語彙導入時の品詞の理解も必要であると述べている。さらに、心身状況を表す擬態語はそれぞれ体の特定部位に使用が限定されるものが多いため、アンケート③では、特定部位に対応する擬態語を選択する部分作文を実施している。その結果、アンケート②で正答率が低いものとアンケート③で正答率の低いものがおおよそ一致し、関連性が見られたという。

吉永（2011）では、初級、中級、上級の中国語母語話者を対象に擬態語を含む心身表現の誤用を調べているが、誤用が多く、上級者でも様々な誤用が見られたという。これらの原因は両言語の心身表現の対応の複雑さ、人称制限や格助詞、品詞などの表現差によるものと判断している。

中国語母語話者にとって日本語オノマトペの習得が困難であることが上記の研究から明らかになった。その原因として、中国語にはオノマトペ（特に擬態語）が少ないことと、中国語では擬態語によって様々な状況を表現し分ける言語習慣がないことが挙げられている（吉永2017）。

一方、グエン（2017）では、ベトナム語にはオノマトペが数多く存在し、日常生活で頻繁に使用されているため、オノマトペに対する親しみがあり、日本語を学習していく上での強みを持っていることが述べられている。

本研究は、ベトナム人日本語学習者が既知の日本語オノマトペをどの程度適切に使用できているかを調査すると同時に、未知の日本語オノマトペを作り出す際にどのような傾向が見られるかを調査する。また、学習者が産出したオノマトペを通じて、ベトナム人日本語学習者の日本語オノマトペの習得状況を考察し、ベトナム人の日本語オノマトペの教育における有益な示唆を得ることを目指したい。

2 本研究におけるオノマトペの範囲

オノマトペと一口に言っても、研究者によって見解に微妙なずれが見られ、

判断基準は必ずしも一定してはいない。また、先行研究においても、取り扱われているオノマトベの範囲は様々である。

そこで、本研究では、オノマトベの判断基準として、①浅野・金田一(1978)『擬音語・擬態語辞典』、②飛田・浅田(2002)『現代日本語擬音語擬態語用法辞典』、③山口(2003)『暮らしのことば擬音・擬態語辞典4500』、④小野(2007)『日本語オノマトベ辞典』の四つを選択した。この4冊のうち、2冊以上の辞典に記載されている語をオノマトベとして取り扱う。そのため、「ちゃんと」「どんどん」など、一般に副詞に分類される語も調査対象となる。

また、正確を期すため、日本語教育学を専攻する日本語母語話者7名のうち、4名以上に認定された語をオノマトベとした。

3 調査概要

3.1 調査の目的

本調査は、以下の研究課題を明らかにすることである。

- (1) ベトナム人日本語学習者は日本語オノマトベをどの程度適切に使用できているか。また、日本語オノマトベの使用能力は、日本での生活経験、日本語のレベルによって、どのように異なるか。
- (2) 該当の日本語オノマトベがわからない場合、ベトナム人日本語学習者はどのような造語法を用いて産出するか。

3.2 調査の材料

筆者はこれまで、日本語オノマトベが外国人学習者に習得が難しいことを認識した上で、学習者のための効果的な教授法の提案に努めてきた。しかし、日本語オノマトベは数が多く、しかもバリエーションが豊富であるため、すべてを習得するのは無理がある。だが、日常会話に頻出するオノマトベならすぐに役に立ち、日本人との会話でも自信に結びつくと思われる。この考えを出発点として、日本語母語話者の会話を収録した『名大会話コーパス』を調査し、そ

表1 日常生活に頻出する21語のオノマトベとその描写文

順番	オノマトベ	描写文
1	くるくる	風車(かざぐるま)が風で_____回っている。
2	うろうろ	今日は学校が早く終わって、することなかったので、学校の前を_____していた。
3	がらがら	昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が_____する。
4	ほっ(と)	難しい仕事をぶじに終えて、_____と一息ついた。
5	ぐっ(と)	名曲(めいきょく)を聞いていて、_____と心に来た。
6	あっさり	日本料理は油をあまり使わず、_____していて体にいい。
7	ぐるぐる	目が_____回る。
8	さらさら	彼女はかみの毛が_____で、きれいだ。
9	すっ(と)	{電車の中で} 若者が_____と立って、お年寄りに席を譲(ゆず)った。
10	たっぷり	お昼は_____のカレーを食べた。
11	ちゃん(と)	子供は、歯磨きが_____とできたね、とママに褒(ほ)められて喜(よろこ)んだ。
12	どんどん	お母さんのおなが_____きくなってきた。
13	にこにこ	この子はいつも_____している。
14	ばたばた	最近仕事がとても忙しくて、_____している。
15	ぼっ(と)	友達と話している時に、_____いいアイデアが思い浮かんだ。
16	ばらばら	ロボットの体が_____になっている。
17	びかびか	くつを_____に磨(みが)いた。
18	びったり	このくつはサイズが_____だ。
19	ふ(と)	夜道を一人とぼとぼ歩いていた。_____と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。
20	ふらふら	道で酔(よ)っばらった人が_____歩いている。
21	ぼうっ(と)	今日は寝不足で頭が_____とじていて集中できない。

ここに頻出するオノマトペを選定した。その結果、日本語母語話者の日常会話に頻出する上位63語のオノマトペが選定されている (Nguyen 2012) ^[註1]。

また、三上 (2007) は8つの言語資料から70語のオノマトペを選定している。本研究はNguyen (2012) と三上 (2007) のリストを組み合わせ、2つのリストに共通して出現するオノマトペを21語抽出し、それらを誘出する独自のアニメーションを制作した。アニメーションは21語を再生する21シーンから構成され、上映時間は10分34秒である。各シーンに、該当オノマトペの描写文が画面下に字幕として表示される。学習者に配布する「回答用紙」には、画面に表示される描写文が書かれているが、できるだけ日常会話に使われている用例に近いものになるように作例に努めた。

アニメーションの画面の例は、以下の図を参照されたい。



図1 アニメーション画面のキャプチャ

3.3 調査対象者

調査は2016年6月～8月に実施した。調査対象者は、ベトナムにある某大学の日本語学部 に在学中の留学経験のないベトナム人日本語学習者64名 (1年生12名、2年生33名、3年生19名) と、日本に在住中のベトナム人留学生8名である。ベトナムでは新学年が9月に始まるため、ここで言う1年生、2年生、3年生はそれぞれ1年次、2年次、3年次修了の学習者のことである。今回の調査で当日の日本語能力測定テストは実施できなかったが、履修授業のシラバス、担当教員への聞き取りにより、学習者の日本語能力は概ね1年次修了時で初級を終え、2年次修了時で中級後半、3年次修了時に上級前半を終える段階に相当すると判断した。また、フェイスシートによれば、1年生の58.3%がN3取得者、

2年生の75.8%がN3取得者、24.2%がN2取得者、3年生の84.2%がN2取得者であった。

一方、留学生は日本在住期間が3年から12年であり、全員N1資格を有し、日常生活や職場・バイト先で日本人と接触するチャンスがよくある学生たちである。専門は日本語教育、経済学、技術、マーケティング、社会学である。

統制群として、日本語母語話者20名に対してオノマトペ使用調査を実施した。人数は多いとは言えないが、年齢 (19歳～69歳)・職種 (銀行員、会社員、主婦、大学生、大学院生など) にできるだけ多様性を持たせ、代表性を高めるように努めた。

3.4 調査の手続き

調査は2つのステップからなり、統制群である母語話者にはステップ1のみ協力を得た。

【ステップ1】

回答用紙を配って、アニメーションを上映する。21シーンのアニメーションを順に見て、各例文が完全に映し出された後、15秒の間で画面の描写としてふさわしいオノマトペを回答用紙に記入する。正確にわからない場合は、自分なりのオノマトペを産出してもらおう。どうしても思いつかない場合はそのまま無回答にしてもよいという指示を出した。アニメーションの上映が終了したら、すぐに回答用紙を回収する。

【ステップ2】

アニメーションが終了したら、10分ぐらい休憩した後、日本語学習歴や日本語オノマトペの使用状況、学習方法に関するフェイスシートに記入してもらい、一部の学習者にフォローアップ・インタビューを行った^[註2]。

母語話者と留学生に対する調査は個別に静かな個室で行った。ベトナム在住の学習者に対しては、大学の大きなホールで各学年同時に、私語が許されない条件下で実施した。ステップ1とステップ2の所要時間は30分程度であった。

4 結果と考察

4.1 母語話者の答えと正答の基準

本調査が対象とした21語のオノマトペを再現するアニメーションは、それぞれの語を一義的に再現できるよう、日本語母語話者を対象にパイロット調査を3度行い、修正に努めた^[註3]。それでも、本調査の結果、シーンによっては回答が割れるものがあり、母語話者でも、筆者の意図した通りの回答が得られるとは限らないことがわかった^[註4]。そこで、母語話者が記入した回答の中で、本研究で設けられた条件を満たすオノマトペはすべて正答と認め、学習者がそれと同じ回答をした場合に正答と判断した^[註5]。また、学習者が出した回答のうち日本語教育専攻の母語話者にふさわしいと判断されたものも正答とした。それ以外の答えは「産出」というラベルを貼り、何も書いていない場合は無回答とした。

4.2 ベトナム人日本語学習者による日本語オノマトペの正答率

ここでは、ベトナム人日本語学習者各グループの正答率から、日本語能力(学年別)の違い及び日本での生活経験(留学経験)の有無によってどのような違いがあるかを考察する。調査のステップ1の学習者の回答の判定については、日本語教師の経験がある日本語母語話者1名に協力してもらった。上述した日本語母語話者の回答から得た正答のオノマトペ以外に、日本語教師経験のある日本語母語話者が適切と判断した語も正答とした。なお、回答用紙に何も書かれていない場合は「無回答」とした。そして、調査のステップ2では、調査対象である21語のそれぞれに「知っていますか」という質問の項目を設け、「知っている」と回答した場合に「既知」と判断した。

表2は、4つのグループの正答率・既知率・無回答率及びそれぞれの平均値をまとめたものである。表2からわかるように、4グループの平均正答率は45.7%であった。

既に述べたように、中石ほか(2011)では中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、アニメーションで使用文脈を提示してオノマトペの使用を誘出

表2 ベトナム人日本語学習者の正答率・既知率・無回答率(%)

オノマトペ	留学生			3年生			2年生			1年生		
	正答率	既知率	無回答率									
くるくる	75	100	0	47.3	31.6	5.2	48.5	39.4	18.2	16.7	2.5	33.3
うちうち	75	75	2.5	68.4	73.7	10.5	9.1	39.4	33.3	33.3	7.5	33.3
がんがん	75	100	12.5	52.6	42.1	10.5	63.6	60.6	3	66.7	91.7	2.5
ほっ(と)	62.5	75	0	63.1	84.2	15.8	51.5	69.7	12.1	41.7	7.5	8.3
ぐっ(と)	2.5	2.5	50	0	36.8	26.3	3	42.4	42.4	0	33.3	50
あっさり	75	87.5	2.5	73.6	89.5	5.2	60.6	63.6	24.2	16.7	41.7	50
ぐるぐる	87.5	87.5	0	36.8	42.1	5.2	9.1	60.6	42.4	0	58.3	33.3
さらさら	62.5	75	12.5	68.4	47.4	0	6.1	30.3	18.2	0	41.7	33.3
すっ(と)	75	75	2.5	21.1	36.8	26.3	3	27.3	27.3	8.3	58.3	50
たっぶり	87.5	100	12.5	84.2	89.5	0	12.1	48.5	36.4	2.5	91.7	16.7
ちゃん(と)	62.5	100	2.5	52.6	94.7	0	15.1	93.9	3	2.5	100	16.7
どんどん	87.5	100	12.5	84.2	100	5.2	51.5	100	18.2	100	100	8.3
にっここ	75	100	2.5	94.7	100	0	69.7	100	15.1	58.3	100	2.5
ばたばた	75	75	2.5	15.7	52.6	31.6	9.1	27.3	54.5	8.3	41.7	41.7
ばっ(と)	50	75	12.5	63.1	21.1	5.2	42.4	15.2	27.3	16.7	0	41.7
ばらばら	100	100	0	84.2	89.5	5.2	81.8	78.8	9.1	2.5	83.3	41.7
びかびか	75	100	2.5	68.4	100	0	78.8	9.7	6.1	16.7	91.7	2.5
びったり	87.5	100	0	73.6	100	10.5	72.7	84.8	18.1	58.3	91.7	2.5
ぶ(と)	37.5	50	37.5	26.3	26.3	42.1	6.1	6.1	33.3	0	33.3	66.7
ぶらぶら	75	100	2.5	52.6	68.4	26.3	30.3	66.7	36.4	16.7	66.7	7.5
ぼろっ(と)	75	75	2.5	26.3	15.8	36.8	9.1	15.2	39.4	0	8.3	41.7
平均値	67.3	84.5	17.9	55.1	63.9	12.8	34.9	55.6	24.7	25.4	62.3	35.3

4つのグループの正答率の平均: 45.7 (%)

する実験を行った結果、平均正答率が24.4%であった。もちろん、中石ほか(2011)と本研究が扱っているオノマトペは異なり、結果を比較しきれないところがあるが、初級と中級の学習者が過半を占めるベトナム人学習者の4つのグループの平均正答率が45.7%であることを考えれば、決して低い正答率ではないと言えよう。しかし、対象とする21語のオノマトペは日常生活に頻出する言葉であることを考えれば、決して高い正答率とも言えない。このように、日常生活に頻出するオノマトペでも半分弱の学習者しか正しく使用できていないことは、学習者のオノマトペ習得の難しさを裏付けていると思われる。

表2からわかるように、正答率を高い順から述べると、日本在住の留学生グループ(67.3%)、3年生グループ(55.1%)、2年生グループ(34.9%)、1年生グループ(25.4%)の順となる。1年生の正答率が4つのグループの中で最も低いが、これは日本語学習歴が短いためであると考えられる。

このように、全体としては、学年が高ければ高いほど、そして、日本での生活が長ければ長いほどオノマトペに馴染みがあり、日本語オノマトペをよく使用できていることが示唆された。

表2を見ると、3グループ以上に正答率が上位のオノマトペは「どんどん」「にこにこ」「ばらばら」「がんがん」「びったり」「ほっ」「あっさり」といったものである。これらは、使い方がはっきりしており、学習者が十分に習得できていることが明らかになった。

逆に、留学生グループを除いて正答率が低い語は「ちゃんと」「ぐるぐる」「すっ」「ばたばた」「ふ」「ぼうっ」「ぐっ」である。グエン(2017)のアンケート調査結果では、ベトナム人学習者が日本語オノマトペを覚えようとしている場合、その意味をベトナム語に訳して暗記すると回答した学習者が4つのグループにおいて過半を占めている。「名曲を聞いて、ぐっと心に来た」という「ぐっ」の言い方、および「ふと空を見上げる」という「ふ」という言い方であるが、ベトナム語では、同じ場面では「chạm tới trái tim(心に来た)」という表現だけで十分であるし、「bất chợt nhìn lên bầu trời(思わず、空を見上げると〜)」という言い方をしていることが多いため、母語を頼りにしている学習者にとって習得が難しい。そして、「目がぐるぐる回る」の「ぐるぐる」であるが、ベトナム語では「quay như chong chóng(風車のように回る)」という比喩表現で表現されるため、

「ぐるぐる」とすぐ思い出せる学習者がなかなかいない。「ばたばた」の例であるが、母語話者の回答には「ばたばた」「いらいら」「せかせか」「ぐったり」で答えがいくつもある。「ばたばた」の描写文である「最近仕事がとても忙しくて、_____している。」という文からは「ばたばた」「ぐったり」の産出がありうるし、画像からは「いらいら」「せかせか」の産出もありうるため、今回の「ばたばた」の例は例文からの推測と画像からの推測に挟まれる可能性が高い。そのため、留学生のグループを除いてベトナムにいる学習者の正答率が低かったと考えられる。「ぼうっ」と「すっ」というオノマトペはABABという反復形ではない。ベトナム人学習者にとってオノマトペは反復形をしている言葉であるイメージが強い(グエン2017)ため、ABABの形を持っているオノマトペ以外のものはあまり馴染みがなく、習得しにくい可能性が考えられる。正答率が低いオノマトペの中には、「ちゃんと」も入っている。「ちゃんと」は4グループにおいて既知率がほぼ100%にもかかわらず、正答率が1年生25%、2年生15.1%、3年生52.6%、留学生62.5%と低かった。これは「ちゃんと」がオノマトペと結びつきづらく、15秒という短時間では閃きにくいためであると思われる。このように、一般的に副詞に分類される語は、既知であっても、オノマトペだと考えないため、回答として選ばなかった様子が窺える。

次に既知率と正答率の関係を見てみたい。

全体的に見ると、既知率が正答率より高い。これは、あるオノマトペの意味を知っていても、実際の場面に使用できるとは限らないことを意味している。そして、同じ既知率でも留学生のグループのほうが、正答率が高い。これはあるオノマトペを知っていても、日本で生活をしていると、定着度が高くなり、運用能力が高くなることを意味している。

4つのグループにおいて既知率が高いのが「たっぶり」「ちゃんと」「どんどん」「にこにこ」「びかびか」「びったり」「ばらばら」で、これらのオノマトペは教科書に取り上げられるため、既知率が高いと考えられる。しかし、「どんどん」「ちゃんと」のような一般的には副詞に分類されるオノマトペの正答率は思ったほどではなかった。「ちゃんと」の既知率が高いにもかかわらず正答率が低い要因は先ほど述べた通りであるが、「どんどん」の既知率は4つのグループ全てで100%であり、1年生の正答率が100%で、2年生の正答率51.5%

よりはるかに高かった。これは1年生のほうが2年生よりできているというより、ここに入りそうなオノマトペをそれしか知らなかったため、特に疑問も抱かず使った結果だと思われる。

また、調査実施の際には、該当のオノマトペがわからず、どうしても産出できない場合は無回答にしているという指示を出してあった。グループ別の無回答率を見ると、1年生グループがもっとも高く35.3%であった。残りのグループの無回答率はさほどの差がなく、20%前後にとどまった。アニメーションの各シーンは例文が完全に写された後画面が15秒止まったままの考える時間があるが、やはりその時間でも十分でないことがわかった。

4.3 産出の傾向

既に述べたように、正答以外の回答は産出と称する。産出には、グループを問わず、同じような回答を出している傾向が窺えた。学習者の回答を見ると、次のような傾向が見られた。

4.3.1 知っている語の語基を反復させ造語する

回答の中で、知っている語の語基を反復しオノマトペを産出する例が多く見られた。例えば、「風車（かざぐるま）が風で_____回っている。」という「くるくる」の例であるが、「まるまる」と答えた学習者が10名存在する。この場合、正答を知らないか、すぐに思いつかないため、画像から「丸（まる）い」形をイメージし、その語基である「まる」の部分反復させ、「まるまる」の産出に至ったと思われる。同様に、「昨日はお酒を飲みすぎたせいで、頭が_____する。」の例で、正答が「がらがら」であるが、「いたいた」と回答した学習者は11名いる。この場合も、「いたい」という感覚を生かし、その語基である「いた」の部分反復させ、「いたいた」の産出に至ったと思われる。今回の調査結果、学習者の産出はすべてABAB型の語であることから、ベトナム人学習者にとってオノマトペは反復をしている言葉であるイメージが強い（ゲン2017）ということが改めて確認された。なお、中石ほか（2011）では、知らないオノマトペを使って文を作らせる課題と、ABAB型のオノマトペの意味を説明させるという補助課題があり、被験者は与えたオノマトペから語基となる

部分を取り出し、それと同じ発音の言葉に当てて、意味を類推する例が見られた。これは本研究の産出課題と方向が逆であるが、学習者はオノマトペが言葉の語基の反復であると強く認識していることの証左であろう。

4.3.2 物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトペを産出する

学習者の回答の中には、物事の状態を音で模倣し、オノマトペを産出する例も多く見られた。

例えば、「風車（かざぐるま）が風で_____回っている。」の例であるが、学習者の回答の中で、「ふゆふゆ」「ひゅひゅ」「びゅびゅ」「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」「びゅうびゅう」のような、似ている回答を出したベトナム人学習者が11名いた。これらの産出経緯に関して、フォローアップ・インタビューを実施した。まず、「ふゆふゆ」の産出の例であるが、この回答をした2名は同じ次のような説明をした。ベトナム語では、「chong chóng quay vù vù（風車がvù vùと回っている）」というように、風車が回っている時に発する音に着目し描写する言い方がかなり一般的である。そのため、正答がわからなかったため、ベトナム語の表現をそのまま真似して産出したという。しかし、日本語には「v」という子音が存在しないため、発音が一番近いと感じている「f」で表記した結果、「ふゆふゆ」と産出した。つまり、風車が回っている状態を擬音的に捉えオノマトペを産出したわけである。次に、「ひゅひゅ」「びゅびゅ」「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」「びゅうびゅう」と回答した学習者のうち、2名にフォローアップ・インタビューを行ったところ、風が吹いている時の音を模倣する「hiu hiu」というベトナム語の擬音語と連想し、それぞれ「ひゅうひゅう」「びゅうびゅう」の産出に至ったという回答が得られた。

同じく「難しい仕事を無事に終えて、_____一息ついた。」の例であるが、「ふうふう」「ふゆふゆ」「ふっ」と産出した学習者が17名もいる。ベトナム語では「ほっと一息ついた」のことを「thờ phứ một cái（ふうという音をして一息ついた）」という言い方をする。この場合も、物事の状態を擬音的に捉え、日本語オノマトペを産出したのではないと思われる。

4.3.3 意味または発音が似ているオノマトベとの混同

「ロボットの体が_____になっている。」の例文の正答は「ばらばら」であるが、「ごちゃごちゃ」と回答した学習者が3名いる。「ばらばら」は本来一つにまとまるはずのものが分解された状態を表すのに対し、「ごちゃごちゃ」は種々のものが乱雑に入り混じった様子を表す。学習者にはこの区別は難しく、混同が起きたと思われる例が3例見られた。グエン (2017) では、50%以上の学習者が日本語オノマトベを勉強する際に、母語に訳して意味を覚えていることが判明した。「ばらばら」と「ごちゃごちゃ」はベトナム語で同じ言葉で表現することができるため、ベトナム語の同じ言葉で把握されている可能性が高い。

また、「夜道を一人とぼとぼ歩いていた。_____と空を見上げると、お月様が私に笑いかけてくれ、元気が出た。」の例で「もんやり」という回答もあった。「ふ」が典型であるが、「ぼんやり」という解釈もありうる。フォローアップ・インタビューでは、「ぼんやり」と回答しようとしたが、発音が近い「もんやり」と間違えたことが判明した。同じく、「びかびか」を「びかびか」、「びったり」を「びたり」「ぶらぶら」を「ぶらぶら」とするような発音が近い言葉との混同の例もいくつか見られた。なお、中石ほか (2011) でも同じような傾向が観察されている。

5 まとめと今後の課題

以上、独自に制作したアニメーションを用い、日本語母語話者を統制群として、ベトナム人日本語学習者を対象にオノマトベの使用実態と産出傾向を調査した。その結果、日本在住のベトナム人留学生グループの日本語オノマトベの正答率ももっとも高いことがわかった。また、正答率は留学生グループ、3年生、2年生、1年生の順に高くなっている。これは、日本での生活経験、日本人と接触するチャンスが多ければ多いほど、そして、日本語能力が高ければ高いほどオノマトベの定着度が高くなり、オノマトベがよく使用できるようになることを意味する。すなわち、日本語オノマトベの使用能力は留学経験と日本語学習歴と比例するとと言える。確かに、ベトナムにいる学習者は日本在住の留学生より、日本人と接触するチャンスが少ないが、インターネットが普及している現代社会では、日本の

アニメなどの視聴により、オノマトベを含む日常生活に必要な言葉に対する馴染みが生まれ、オノマトベの自然習得につながると思われる。

次に、未知のオノマトベの産出傾向であるが、ベトナム人学習者は反復造語法を活用したり、物事の状態を擬音的に捉え日本語オノマトベを産出したりする様子が窺えた。また、意味や発音が近いオノマトベとの混同も見られた。ベトナム語にはオノマトベに相当する語群は数多く存在し、ベトナム人学習者はオノマトベに対する馴染みがあり、日本語オノマトベの習得に強みを持っていることはグエン (2017) で既に述べられている。しかし、日本語とベトナム語のオノマトベは意味にずれがあるため、日本語オノマトベの意味を母語に訳し暗記してしまうと混同が起きてしまう。日本語オノマトベを十分に習得させるために、アニメの視聴などの自然習得を奨励する一方、オノマトベの用例を導入する際に、場面の状況を十分に提供し、日本語での典型的な場面で練習させることが効果的であると思われる。

今回の調査は各グループに人数のばらつきがあるため、一般の傾向を出すに至らなかったが、今後は人数をそろえ調査を実施し、ベトナム人日本語学習者の日本語オノマトベの使用実態と産出傾向を一般化していきたい。また、オノマトベが少ない中国語母語話者に対して同様の調査を実施し、中国人学習者の日本語オノマトベの使用実態と産出傾向も検討し、日本語オノマトベの教育に有益な示唆を提案できればと考えている。

〈一橋大学大学院生〉

注

[注1] ……日本語のオノマトベは副詞、動詞、形容詞、名詞など多くの用法があるが、圧倒的に多いのは副詞としての用法である。Nguyen (2012) では、名大会話コーパスにおけるオノマトベの最も代表的な用法である副詞の用法のオノマトベを抽出し、上位の60語を初級日本語教育に取り入れるべき語として提案している。本研究は、副詞だけではなく、『名大会話コーパス』に出てくるすべての用法のオノマトベを抽出し、日本語母語話者の日常会話に頻出する上位63語を選定しているため、Nguyen (2012) が提案している語と多少ずれがある。

[注2] ……学習者がフェイスシートに記入してもらっている間に、ステップ1終了後の回答用紙をさっと見て、気になる回答を見つけ、学習者に対してフォローア

ップ・インタビューを実施した。

- [注3] …… 統制群として調査にご協力いただいた20名の母語話者には、パイロット調査の協力者は含まれていない。
- [注4] …… 回答が割れるものはあったが、母語話者の中で、調査したい21語のオノマトベと同じ回答をした割合は70%を超えており、高い一致率をしめしている。
- [注5] …… 母語話者が出した正答とみられるものは以下の通りである。そのうち、太字で書いてあるのが調査対象の21語のオノマトベで、()の中で書いてあるのが調査対象の21語のオノマトベと異なるが、正答とみられる回答である。
- くるくる (ぐるぐる、ゆったり) うろろう (ぶらぶら、うろちょろ、ゆったり) **ががが** (ずきずき、きんきん、ぐらぐら) **ほっ** (はっ、やれやれ) **ぐっ** (じーん) **あっさり** (さっぱり、さらっ) **ぐるぐる** (くるくる) **さらさら** (つやつや) **すっ** (さっ、ささっ、ぱっ) **たっぶり** (もりもり、どっさり) **ちゃん** (きちん、ぼっちり、ごしごし) **どんだん** (だんだん) **にこにこ**、**ばたばた** (いらいら、せかせか、ぐったり) **ぱっ** (びん、ふ) **ばらばら**、**ぴかぴか**、**ぴったり** (きちきち) **ふ** (ぼっ、ひょい) **ふらふら**、**ぼうっ** (くらくら、ぐらぐら)

参考文献

- 浅野鶴子 (編) 金田一春彦 (解説) (1978) 『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 有賀千賀子 (2007) 「オノマトベを通じて、語彙の学習・教育について考える」『日本語学』26(7), pp.65-73. 明治書院
- 小野正弘 (2007) 『日本語オノマトベ辞典』小学館
- 金慕箴 (1989) 「中国における日本語の擬音語擬態語教育について」『日本語教育』68, pp.83-98. 日本語教育学会
- グエンティaintトゥイ (2017) 「日本語オノマトベの習得におけるベトナム語母語話者の強み」『一橋大学国際教育センター紀要』8, pp.69-80. 一橋大学国際教育センター
- 張麗群 (1989) 「中国人から見た日本語の擬音語と擬態語」『日本語教育』68, pp.128-130. 日本語教育学会
- 飛田良文・浅田秀子 (2002) 『現代擬音語・擬態語用法辞典』東京堂出版
- 中石ゆうこ・佐治伸郎・今井むつみ・酒井弘 (2011) 「中国語を母語とする学習者は日本語オノマトベをどの程度利用できるのか—アニメーションを用いた産出実験を中心として」『中国語話者のための日本語教育研究』2, pp.42-58. 日中言語文化出版社
- 彭飛 (2007) 「ノンネティブから見た日本語オノマトベの特徴」『日本語学』26(7), pp.48-56.
- 三上京子 (2007) 「日本語教材とオノマトベ」『日本語学』26(7), pp.36-46.
- 山口仲美 (2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典4500』講談社
- 吉永尚 (2011) 「中国語母語話者における心身表現上の母語干渉について」『園田学園女子大学論文集』45, pp.167-180. 園田学園女子大学
- 吉永尚 (2017) 「心身の状況を表す擬態語の習得についての考察—中国語母語話者の作文データをもとに」『園田学園女子大学論文集』51, pp.93-103. 園田学園女子大学
- Nguyen Thi Thanh Thuy (2012) 「初級日本語教育に取り入れるべきの擬音語擬態語の提案」『VNU Journal of Science, Foreign Languages』28, pp.287-293. ハノイ国家大学出版